

「実用的スタートカリキュラム」の開発に関する研究：小1プロブレムの解消を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2023-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 正弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000082

「実用的スタートカリキュラム」の開発に関する研究

－小1プロブレムの解消を目指して－

Research on the development of a
“practical starting curriculum”

Aiming to Solve the "First-Grader Problems" in Elementary School

田村正弘*

TAMURA Masahiro

1 問題の所在

小学校において、学級が集団教育の機能を果たせず、通常的手法では問題解決が図れない状態が継続することを1990年代後半から「学級崩壊」という表現を用いてマスコミで報道されるようになった。このことは、学校に対する保護者の不信を招くだけでなく、教職員の心身の健康を脅かす可能性が高く、学校経営者にとっては脅威となる。

新保（2010）によれば「学級崩壊は、思春期前期の子どもたちがピアプレッシャー（同調圧力）を受けながら教師に反発して、学級集団を『崩壊』させていく学級機能不全の状態」としている。また、「小学校1年生が新学期を過ぎても落ち着かず、学習が成立しない状況を『学級崩壊』とは区別して『小1プロブレム』と名付け、1997年から研究を開始してきた。教育行政においては、2000年3月、当時の文部省から研究委託された国立教育研究所（現国立教育政策研究所）が、『学級経営をめぐる問題の現状とその対応』という最終報告書の中で、はじめて『小1プロブレム』を『小1問題』という名称で取り上げたことにより、『小1プロブレム』の認知は一気に世間に広がった。」と述べている。

2008年3月には、小学校学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針が改訂され一斉に告示された。「小学校学習指導要領解説 生活編」では、「改訂の趣旨（1）改善の基本方針」の中で「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ること。」とし、「改善の具体的な事項（オ）」では「幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図る観点から、入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科の内容と合わせて生活科を核とした単元を構成したり、他教科においても、生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る。」と記述されている。さらに、「生活科改訂の要点（2）内容及び内容の取扱いの改善⑤幼児教育

* 足立入谷小学校校長

及び他教科との接続」においては「幼児教育との接続の観点から、幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科との関連を図る指導は引き続き重要であり、特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした。」と示している。このように幼児教育との接続と「スタートカリキュラム」の必要性が明確に示された。

しかし、2009年に東京都教育庁が発表した「公立小学校第1学年の児童の実態調査」によれば、「4校に1校の割合で小1プロブレムが起きていて、児童の不適應状況はその6割近くが4月に発生し、いったん発生すると、その混乱状態が学年末まで継続するケースが5割を超える。児童が小学校になじめない原因としては、児童にストレス耐性や基本的な生活習慣が身につけていなかったことや家庭の教育力の低下、担任の指導が適切でなかったことなどがあげられている。」と報告されている。

一方、文部科学省は、2010年11月に、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」において議論された結果を「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」として公表した。その中で、「スタートカリキュラム」の意義として「幼児期と児童期の教育との接続を円滑に進めることは、児童の円滑な小学校生活のスタートにつながるとともに、小学校としても現在問題となっているいわゆる『小1プロブレム』の発生を防止することにつながるなど、小学校側に大きなメリットを与えるものである。」と報告している。

筆者が校長を務める足立区においても「小1プロブレム対策」として、2010年度から区内全小学校を核として「幼保小連携ブロック会議」を開催し、幼児教育施設との交流を定期的実施するようになった。学校案内や、ものづくり、給食体験、ランドセル体験等、各校・園の工夫により、幼児にとっても児童にとっても魅力ある体験活動を行ってきた。しかし、これらの交流活動が互いの教育課程上どのような位置付けになっているのかが曖昧な現状もあった。そこで、相互の教育の目的と内容を理解した上で、「小1プロブレム」といわれる不適應を最小限にするための「小学校スタートカリキュラム」の開発を行うこととした。作成にあたっては就学前教育の実態や家庭環境の違いを重視するために地域の実態に即したカリキュラムとすることを視点として、足立区の小学校校長会の協力を得ながら研究することとした。

2 研究の目的

- (1) 幼稚園教育要領や保育所保育指針の内容と、小学校学習指導要領の内容との関連性・連続性を明確にする。
- (2) 幼児教育施設から小学校への円滑な接続を阻む原因となるギャップを明確にし、ギャップ解消のための「スタートカリキュラム試案」を作成する。
- (3) 作成した「スタートカリキュラム試案」を区内全小学校で参考として活用してもらうことにより、効果検証をし、より実用的で誰もが活用しやすい「スタートカリキュラム」に改訂し提供する。

3 研究の内容

3.1 小学校学習指導要領と幼稚園教育要領の連続性についての考察

2008年に公示された「小学校学習指導要領」の各教科と「幼稚園教育要領」のねらいや領域、内容との連続性を明確にするために、小学校の教科の目標や内容を切り口にした関連表を作成した。【資料1】は、生活科の目標や内容を切り口にして、関連する幼稚園教育要領のねらいや領域、内容を示したものである。保育所保育指針については内容が重複するため省略している。

【資料1】 小学校「生活科」を切り口とし幼稚園の保育内容との連続性を明確にした例

＜生活科の目標＞		
<p>具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。</p>		
	小学校生活科の目標・内容(抜粋)	関連する幼稚園の領域・内容(抜粋)
目標・ねらい	<p>(1) 自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、地域のよさに気付き、愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようにする。</p> <p>(3) 身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにする。</p>	<p>◎「健康」領域</p> <p>(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。</p> <p>◎「人間関係」領域</p> <p>(2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。</p> <p>(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。</p>
内容	<p>(1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもち、安全な登下校ができるようにする。</p> <p>(2) 家庭生活を支えている家族のことや自分のできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気をつけて生活することができる。</p> <p>(3) 自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。</p> <p>(4) 公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。</p> <p>(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわる楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。</p> <p>＜指導計画の作成及び内容の取扱い＞</p> <p>(3) 具体的な活動や体験を行うに当たっては、身近な幼児や高齢者、障害のある児童生徒などの多様な人々と触れ合うことができるようにすること。</p>	<p>◎「健康」領域</p> <p>(1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。</p> <p>(5) 先生や友達と食べることを楽しむ。</p> <p>(6) 健康な生活のリズムを身に付ける。</p> <p>(7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。</p> <p>(9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。</p> <p>(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。</p> <p>◎「人間関係」領域</p> <p>(1) 先生や友達と過ごす。</p> <p>(2) 自分で考え、自分で行動する。</p> <p>(3) 自分でできることは自分でする。</p> <p>(6) 自分で思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。</p> <p>(7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。</p> <p>(9) よいことや、悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。</p> <p>(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。</p> <p>(11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。</p> <p>(12) 共同の遊具や用具を大切に、みんなで使う。</p> <p>(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に深いいろいろな人に親しみをもつ。</p> <p>◎「言葉」領域</p> <p>(6) 親しみをもって日常のあいさつをする。</p>

<考察>

生活科の目標は、他教科のような到達目標ではなく、「自立への基礎を養う。」という方向性を示した目標であり、その点においても幼稚園教育要領との関連が強く図られている教科である。他にも「体育」と「健康」、「国語」と「言葉」、「図画工作」と「表現」の関連表を作成した。

3.2 幼児教育から小学校へ入学する際に予想されるギャップの想定

小学校入学時におけるギャップを探るため、新1年生にとって困難だったことなどを足立区内12校の第1学年担任から聞き取り、49項目に集約し【資料2】にあるように、「A生活習慣に関すること」、「B他者とのかかわりに関すること」、「C学習に関すること」の3つの視点に分類し、さらに各視点を3～4観点に細分化して計10観点に当てはめた。

【資料2】

幼児教育から小学校教育へ移行する際に予想されるギャップ（小学校側から見た課題）

視点A「生活習慣に関すること」

観点	指摘された項目
① 一日の生活	<ul style="list-style-type: none"> ○登下校は原則一人で行う（一部登下校班の学校もあり）ので、自らの安全管理が求められる。また、保護者の引率がないことから、保護者と教職員のコミュニケーションを図る場が減少する。 ○登校から下校まで、生活時程に定められた時刻を意識して行動することが求められる。 ○チャイムを合図に1単位時間（45分）ごとの学習が継続する。 ○登校から下校まで、基本的に集団での活動が続く。（幼児教育での「自由保育」に相当する部分がない。） ○一単位時間の合間の「休み時間（通常5分）」にトイレ、水飲み、手洗い、うがい等を自らの判断で行うことが求められる。 ○長い休み時間を校庭等で遊ぶ場合は、体格のまったく異なる上級生と接触する機会があり、安全面に気を付けて遊ぶ必要がある。
② 学習環境	<ul style="list-style-type: none"> ○教室では、一人一人の机とイス、ロッカー等が決められていて、それらの管理は、各自が主体的に行う。 ○通常、全児童が黒板を向いて学習に取り組み、児童同士が向き合う場面は減少する。 ○教室内（特別教室を含む）には、児童にとって魅力的な学習道具や教材があり、注意が散漫になりやすい。 ○黒板や掲示物から、今後の予定などの情報を読み取る力が必要になる。 ○広い校庭や体育館、深いプールなどで学習したり、遊んだりする機会があり、ダイナミックな動きを必要とすると同時に安全に注意した行動が求められる。
③ 身の回りの管理	<ul style="list-style-type: none"> ○教科書や鍵盤ハーモニカ等の学用品、体育着、上履き、ランチョンマット等、自分の持ち物として管理するものが多くなり、ロッカーなどの収納を自ら行うことが求められる。 ○机の中の道具箱を活用し、整理整頓することが求められる。 ○ハンカチやティッシュは、通常ポケット等に入れ、汗の処理や鼻をかむなどを自らの判断で行う。 ○体育着の着脱や靴の履き換えは、休み時間等の限られた時間内で立ったまま行い、脱いだ服や靴の整理整頓も求められる。 ○自分たちが使用している教室や廊下は、当番や役割等を決めて、自分たちで清掃する。
④ 食事・排泄	<ul style="list-style-type: none"> ○給食では、決められた献立で、好き嫌いをなく、20分程度で食べ終わるようにする。 ○給食の準備、配膳、片づけは、班ごとに当番を決め、自分たちで行う。 ○自分で食べられる量に合わせ調節して、残さず食べることが求められる。 ○アレルギー等への対応は、保護者と学校が事前に連携し、除去食等の対応をするが、状況によっては、児童自ら申し出る場合もある。 ○通常は水筒等を持参しないで、水道から自分で蛇口を操作し水道水を飲む。 ○トイレは、原則として休み時間を利用して済ませる。下着等の衣服を全部脱がずに用をたすことが求められる。また、和式トイレの使用が求められる場合が多い。

視点B「他者とのかかわりに関すること」

⑤ 友達との関係	<ul style="list-style-type: none"> ○学級での生活班、縦割り班、係・当番活動、グループ学習など、決められた小集団で、めあてに向かって学びあったり、活動したりする機会が増加する。 ○友達と力を合わせて活動することが求められる時、自分の思いによる勝手な行動や態度が許されない。（自由保育のように自分の好きな活動をする機会が減少する。） ○道徳や学級活動で友達とのかかわり方を学習し、集団生活の意識を高めることが求められる。 ○縦割り班活動や、学校に適應するまでの支援者として、年齢の離れた上級生（主に6年生）とかかわる場面が多くなる。
⑥ 担任との関係	<ul style="list-style-type: none"> ○学級担任とは、1対1の関係でなく、担任対学級全体といった関係の場が増加し、児童も学級の一員としての行動を求められる。 ○担任を独占して話を聞いてもらうような行動は慎むよう指導されることがある。 ○具合が悪い時や、けがをしたときには、自ら学級担任や養護教諭に状態等を説明する必要がある。 ○学級担任以外の教職員とのコミュニケーションを図る必要がある。
⑦ 規範意識	<ul style="list-style-type: none"> ○先生や友達の話は、最後まで黙って聞き、発問や指示などの情報をもとに行動することが求められる。 ○一人で発表・発言する機会が増え、人前で話すことが増加する。 ○自ら善悪や安全・危険などの判断をし、それに基づいた行動が求められる。 ○学校・学級のきまり、学習のきまり、休み時間のきまりなど、集団生活を行う上での様々な規則を守ることが求められる。

視点C「学習に関すること」

⑧ 学習習慣・意欲	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園では遊びを中心とした総合的な学びを経験してきたが、一斉指導形態による教科指導を中心とした学習に変わる。 ○時間割はすべて教科等の学習で埋められており、学習中心の学校生活となる。 ○発言の際には、挙手して、指名されてから発言することが求められ、思いついたことをすぐに言葉にして発すると注意されることもある。 ○宿題や放課後の個別指導など、授業時間以外でも学習する習慣を身につけることが求められる。 ○体験的に学ぶ学習の機会が減少し、座ったまま教師の説明や教科書等の資料による理解が求められる。
⑨ 教科等	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園教育要領（保育所保育指針）で示された「方向目標」達成のためのカリキュラムから、小学校学習指導要領の各教科等における「到達目標」達成のためのカリキュラムによる学習及び評価が実施される。 ○学習した内容の定着状況を点数で評価し、児童や保護者に知らせるようになる。 ○一つ一つの学習が後の学習につながる系統性を重視したカリキュラムが生まれ、習得が不十分なものと、後の学習への理解や意欲に影響が出てしまう。 ○教科書や黒板に書かれている「文字言語」による理解を求められるようになる。
⑩ 運動・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○遊びを中心として体を動かすのではなく、体育の指導計画に沿った体育の学習や体育行事等を中心に体力向上を図る。 ○体力テストにより、自分の体力の状況を数値で知らされる。 ○けがの防止や姿勢の保持などにつながる体力や身体のバランスのとれた動きを高めていく。 ○図画工作や生活科等、各教科の学習の中で、スケッチしたり、絵や図で表したりする機会が増加する。 ○伴奏に合わせて、リズムよく歌ったり演奏したりして音楽の表現をする。 ○ブロックやおはじきを操作し、具体的な思考を補完するような操作的な学習機会が増加し、手を使っての細かい作業が求められる。

3.3 小学校入学後3か月でめざす児童の姿と重点指導内容例の作成

3.2で示した「予想されるギャップ」をできるだけ速やかに解消するために、小学校入学後、約3か月でめざす児童の姿を設定し、それを達成するために入学後に行うべき重点指導内容例を検討し視点ごとに一覧表にまとめた。【資料3】は、「A生活習慣に関すること」に関する一覧表であるが、「B他者との関わりに関すること」、「C学習に関すること」についても同様に作成した。

【資料3】入学後3か月のめざす児童の姿と課題解決のための重点指導内容例

視点A 生活習慣に関すること

観点	めざす児童の姿（3か月後）	スタート時における重点指導内容例
① 一日の生活	<ul style="list-style-type: none"> ○一人または児童同士の小集団で、安全に注意しながら、寄り道をせずに登下校できる。 ○生活時程に慣れ、チャイムの合図で、次の活動に移行するための準備を整えることができる。 ○学級等の集団で1日中過ごすことができる。 ○休み時間中にトイレ、水飲み、手洗い、うがい等必要なことを済ませることができる。 ○安全に気を付けて遊ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎集団下校指導の実施（通学路安全点検） ◎早寝・早起き指導 ◎15分、20分、30分等、小単位時間でのモジュール授業の導入 ◎朝の時間の工夫（読み聞かせ、簡単な運動）による生活リズム定着 ◎休み時間の活動例の練習 ◎教師も外遊びをしながら指導
② 学習環境	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の机やいすを決められた位置で決められた方向へ向かせ、姿勢よく座り、前を向いて、教師の話の聞くことができる。 ○教室内の掲示や板書を見て、次時や翌日の準備などを理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎入学式直前での座る姿勢、聞く態度の指導とその後の継続 ◎グループや1対1の向かい合い等の机配置の工夫や床に座って話を聞く場等の設定 ◎絵や図を活用した色彩豊かな掲示物の工夫 ◎季節感のある作品やカレンダー等の掲示
③ 身の回りの管理	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で学習用具を揃え、不必要なものは、道具箱やロッカーにしまうことができる。 ○ハンカチやティッシュなどを携帯し、必要に応じて使用し、清潔な生活習慣を身に付けている。 ○決められた時間と場所で着替え、脱いだ衣服等を整理整頓ができる。 ○自分たちの教室や廊下を自分たちで協力して清掃することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎自己管理するものを最小限にし、徐々に増やす。 ◎使用頻度が低いものは担任が管理 ◎登校後の用具の準備片づけの仕方を学年共通にし、継続指導 ◎毎日の持ち物確認 ◎ハンカチ等の使い方指導 ◎着替え、脱いだものの整理の練習（音楽に合わせて時間を体感させる）
④ 食事・排泄	<ul style="list-style-type: none"> ○給食では自分で食べきれぬ量を理解し、必要に応じて、食前に量を減らしたりして、時間内に食べ終えることができる。 ○班の友達などと協力して、給食の配ぜんや片づけを順序よくできる。 ○自分が食べる給食はすべてトレイにのせ、自分の席までこぼさずに運ぶことができる。 ○学校のトイレを使用し、一人で排泄できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎少なめの配膳で、少しずつ量を増やし、自分の適量を把握させる。 ◎給食時間を増やし、一つ一つ確認しながら、作業手順を覚えさせる。 ◎熱い汁もの等は教職員が担当する。 ◎手洗い、机の移動、配膳の仕方等を準備する側と配膳を待つ側に分け、TT指導 ◎和式、洋式トイレ、それぞれの利用の仕方の説明・練習

3.4 小学校「スタートカリキュラム試案」の作成と公開

3.3 で示した「入学後3か月のめざす児童の姿と課題解決のための重点指導内容例」をもとに、入学後の具体的な指導内容を「1週目」と「2・3週目」に分けて【資料4】のように「スタートカリキュラム試案」としてまとめた。本資料を区内全小学校に、作成までの経過資料とともに配布し、各校での新1年生入学直後の指導で活用できるようにした。

【資料4】スタートカリキュラム試案

		入学1週目	2・3週目	
	留意点	<p>☆入学当初の不安な気持ちに寄り添い、母子分離ができていないか、集団適応ができていないか等、一人一人の児童をよく観察し実態把握に努める。</p> <p>☆教科指導や一律指導は、内容の定着を目的とするのではなく、授業の雰囲気や児童に経験させ、慣れさせることを目的として行う。</p> <p>☆生活習慣に関して、指導したことのすべてを児童に定着させることは困難であり、教師が手本を繰り返し示すことで、一部の児童への定着をねらう。</p>		
A	生活習慣に関すること	①	<p>○登校時、通学路には生活指導部等、学校組織で安全管理を行い、第1学年担任は教室で児童を迎える。</p> <p>○登校を渋っている児童や不安を示している児童の把握を行う。</p> <p>○出席を取りながら、一人一人の児童に返事をさせ、健康観察を行う。</p> <p>○下校時刻は余裕をもち、方面別に集団下校を実施する。その際、教職員や下校指導ボランティア等の大人は、交差点など具体的な危険箇所を伝え、渡り方等を実演して示す。</p>	<p>○担任は教室で児童を迎える。</p> <p>○登校を渋っている児童や不安を示している児童は、保護者に連絡する。</p> <p>○健康観察時、具合が悪いときは自分から言うよう指導する。</p> <p>○朝の時間に、読み聞かせや簡単な運動を行い、1日の生活リズムをつくる。</p> <p>○チャイムを意識させ、休み時間の活用方法を指導する。</p> <p>○休み時間は、担任や上級生と一緒に過ごすようにさせ、児童の様子を観察する。</p> <p>○集団下校を継続する。</p>
		②	<p>○前面壁は必要最小限のものだけを掲示する。(学校目標・週時程表・時間割等)</p> <p>○机、いすは、一斉指導隊形で設置したままにする。</p> <p>○座席は入学式当日に指定した場所とする。</p>	<p>○誕生日や班の紹介・係の仕事等の掲示を工夫する。</p> <p>○一斉指導隊形を基本としつつ、生活班で向かい合せになったり、床に座ったり、机を下げていすだけで話を聞く場等を工夫する。</p>
		③	<p>○持ち物は、連絡帳、筆箱(鉛筆3本程度)、下敷き、自由帳、体育着、教科書(国語・算数程度)、ハンカチ、ティッシュ等、必要最小限のものとする。</p> <p>○学習道具等の持ち物の確認を行い、一つ一つ、しまう場所を確認しながら、整理させる。</p> <p>○発育測定に合わせ、体育着への着替え、脱いだ衣服のたたみ方を練習する。</p> <p>○週末には上履きを持ち帰らせる。</p> <p>○掃除はゴミ拾い程度をさせる。</p> <p>○防犯ブザーの使い方を習得させる。</p>	<p>○給食時に必要なもの(ランチョンマット、バンダナ、マスク)等、少しずつ自分で管理する持ち物を増やしていく。</p> <p>○必ず持ってくる物は毎日確認する。</p> <p>○はさみやのりなど、当初はあまり使用しない物は担任が管理する。</p> <p>○毎日の持ち物の確認をする。</p> <p>○ハンカチ等の使い方を指導する。</p> <p>○掃除は、ゴミ拾いに加え、机やロッカー等の整理を行わせる。</p>
		④	<p>○入学後、4、5日目から給食指導を行う。時間に余裕をもって、一つ一つ確認しながら実施する。複数の教職員で全体指導と配膳補助を担う。</p> <p>○給食は少なめの配膳で、足りない場合はおかわりをするようにし、自分の適量を把握させる。</p> <p>○トイレ、水飲み場の確認と、実地で使い方の説明する。</p>	<p>○給食時間は他学年より5～10分程度多めにとり、一つ一つ確認しながら、作業手順を覚えさせる。</p> <p>○熱い汁ものや、給仕が難しいもの、重いものは教職員が担当する。</p> <p>○食事の基本的なマナーを守らせる。</p> <p>○休み時間等を活用してトイレに行くようにさせるが、我慢できない場合は申し出るようにさせる。</p>

観 点	入学1週目	2・3週目
B 他 者 と の 関 係 か わ り と の 関 係 こ と	<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生活科で自己紹介ゲーム等を行い、友達づくりを支援する。 ○毎朝と帰りに友達や先生とあいさつをすることを覚えさせる。 ○6年生等との交流を通して学校や上級生に親しみをもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○隣同士の2人組から、生活班等へ、簡単な活動で小集団を活用する。 ○友達から言われてうれしい言葉や、いやな言葉等について話し合い、言葉づかいの指導をロールプレイ等を活用して行い、よりよい人間関係の基礎を育てる。 ○高学年が責任をもち、手本となる縦割り班活動を実施する。
規 範 意 識	<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校での基本的な生活習慣を担任が実際にやって見せて覚えさせる。 ○一度に複数のことを要求せず、児童にとってすべきことが明確になる分かりやすい指示で指導する。 ○担任の言うことを何よりも優先して聴く習慣を身に付けさせる。 ○一つ一つできるようになったことをほめて伸ばす。 <p>⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ○友達とけんかをしない、先生の話をしっかり聞くことなど、優先順位をつけて、学校でのきまりを一つ一つ指導する。 ○学校のきまりなどを学年便りなどを通じて保護者に知らせ、理解を図る。 ○学級単位での整理の仕方を覚える。 ○誰に対してもあいさつすることの大切さを指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業中と休み時間とは、とるべき行動が違うことを理解させる。 ○やってよいことと悪いことの場面設定によるロールプレイを実施する。 ○先生の指示に従うことを徹底させる。 ○廊下の歩き方や1年生を迎える会での座り方、聞き方を習得させる。 ○誰にでも元気なあいさつができるようにする。
C 学 習 に 関 す る こ と	<p>⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1年生を迎える会に向けて、学ぶべき内容を説明し、楽しみながら学習のめあてをもたせる。 ○早寝早起きや、記名、あいさつ、返事等の生活習慣の確立を目的とした家庭での課題を出す。 ○1単位時間にこだわらず、柔軟に休憩をとりながら指導する。 <p>⑨</p> <ul style="list-style-type: none"> ○国語・生活合科で、あいさつと返事、鉛筆の持ち方、自分の名前の読み書きを練習する。 ○音楽・生活合科で、1年生を迎える会の呼びかけや歌、校歌の練習を行う。 ○生活科では、道具箱の整理を行う。 <p>⑩</p> <ul style="list-style-type: none"> ○体育・生活合科で、体育着への着替え、衣服のたたみ方、簡単な運動を行う。 ○小学校に入学して、やりたいことなどを言葉や絵で表現させる。 ○校歌の指導を通して、小学校の一員であることを自覚させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教科書及び時間割に関するガイダンスを行い、これからの学習の見通しを説明して、学ぼうとする意欲を喚起する。 ○1年生を迎える会に参加し、1年間の学校生活への期待を膨らませる。 ○家庭での課題を継続する。 ○45分を分割するなどして、無理なく1単位時間を覚えさせる。 ○国語でひらがなの読み書きを始める。 ○算数で、仲間分けなどを通して、数への興味をもたせる。 ○生活科で学校探検をし、様々な教室や施設があること、また多くの人がそれぞれの役割を果たしていることに気付かせる。 ○体育では、体づくり運動を通じて、体を動かすことの楽しさや心地よさを味わわせる。 ○危険な場所や行為を具体的に判断する場を設け、安全指導を徹底する。

3.5 小学校「スタートカリキュラム試案」の実施状況と効果検証

2012年3月に開催された「足立区接続期研修会」において「スタートカリキュラム試案」について、作成までの経緯を説明するとともに、作成した資料を提供することで、次年度入学児童への指導に生かせるようにした。

しかし、年度当初の「週ごとの指導計画（週案）」に「スタートカリキュラム試案」が、どの程度活用されているのかを調査すると、「大いに活用した」学級は半数に満たなかった。入学直後の多忙な時期にこれだけの資料を読み込み、各学校に合ったカリキュラムに編成し直し、週ごとの指導計画（週案）に反映することは、第1学年担任にとっては大きな負担となるのは当然である。一方、6月に「スタートカリキュラム試案」に記載されている「スタート時における重点指導内容例」について「4月」または「5月」に意図的・重点的に指導したかどうかを足立区内38校、92学級の第1学年担任を対象に調査した。調査項目は3つの視点、10の観点に沿って、重要と思われる44項目について指導状況を質問した。結果は【資料5】のとおりであった。

<調査結果の概要及び分析>

- ① 重要と思われる取組44項目中33項目については、80%以上の学級で指導が行われていた。このことから、具体的な指導計画としての「スタートカリキュラム」を活用していなくても、第1学年担任は、入学時から1か月程度は小学校への適応を図ることを重視した特別なカリキュラムを編成したり、指導法を工夫したりしている現状が把握できた。ただし、それらは第1学年の学級担任個々の経験知によるところが大きく、小学校第1学年の担任未経験の教員については、適切な時期に適切な指導が実施されているのか疑問が残る。
- ② 視点別に分析すると、A「生活習慣に関すること」について、意図的・重点的に行った割合がB「他者とのかかわりに関すること」、C「学習に関すること」と比較して低い傾向がある。Aの視点は幼児教育で最も重視している内容であり、その指導を小学校入学時に円滑に接続できていない現状が見られる。今後、小学校教員が幼児教育について、より理解を深める必要がある。そのためにも、現在足立区で行っている「小学校教員による保育参観」や「保育体験」の拡充が重要となる。
- ③ 4月に比較して5月に行われている割合が44項目中38項目で低下している。児童が小学校に適応し、学級を安定的に経営するためには、夏季休業近くまで継続して指導すべき内容も多いことから、重点的に指導する時期を明確にすること、週ごとの指導計画（週案）へ簡単に転記できるようにすることなどが課題としてあげられる。
- ④ 意図的・重点的に行った割合が5月になると50%未満に低下している取組が多く、その内容を見ると、登下校などの始業前や終業後、給食時等、授業時間以外の指導内容に偏っている傾向がある。入学当初は学級担任以外が補助的に指導に入るケースが多く、授業以外でもきめ細やかな指導ができるが、その後は、学級担任による授業中の指導が中心になってしまう現状を反映した結果であると考えられる。「始業前」、「授業中」、「休み時間」、「給食指導中」、「始業後」等の指導場面を明確にしたスタートカリキュラムを提示する必要がある。

【資料5】

「スタートカリキュラム試案」の内容について「4月」または「5月」に意図的・重点的に指導したと回答した学級の割合
(調査対象 足立区内38校の第1学年 92学級)

視点	観 点	意図的・重点的に行った取組	4月 (%)	5月 (%)
A 生活習慣に関する事	①	○登校時、通学路での安全管理を第1学年担任以外が行い、学級担任は教室で児童を迎える。	77	54
		○登校を渋っている児童や不安を示している児童の把握を行い、気になる児童は保護者に連絡する。	72	48
		○出席をとりながら、一人一人の児童に返事をさせ健康観察を行い、具合が悪い時は自分から言うようにさせる。	85	85
		○朝の時間に、読み聞かせや簡単な運動を行い、1日の生活リズムをつくる。	62	42
		○チャイムを意識させ、休み時間の活用方法を指導する。	88	85
	②	○下校時刻は余裕をもち、方面別に集団下校を実施する。その際、教職員や下校指導ボランティア等の大人は、交差点など具体的な危険箇所を伝え、横断の仕方等の手本を示す。	85	36
		○前面壁は学校目標・週時程表・時間割等、必要最小限のものだけを掲示し、横・後面壁には誕生日や班の紹介・係の仕事等の掲示を工夫する。	73	73
		○机、いすは、一斉指導隊形を基本としつつ、生活班で向かい合せになったり、床に座ったり、机を下げて、いすだけで話を聞くなど、場に応じた配置を工夫する。	66	82
		○入学後1週間は持ち物を、連絡帳、筆箱(鉛筆の数を示す)、下敷き、自由帳、体育着、教科書(国語・算数程度)、ハンカチ、ティッシュ等、必要最小限のものとする。	92	22
		○学習道具等の持ち物の確認を行い、一つ一つ、しまう場所を確認しながら、整理させるとともに、はさみやのりなど、当初はあまり使用しない物は担任が管理する。	61	27
③	○体育着への着替え、脱いだ衣服のたたみ方を練習する。	95	26	
	○掃除は、ゴミ拾いに加え、机やロッカー等の整理を行わせる。	72	57	
	○週末には上履きを持ち帰らせる。	98	86	
	○防犯ブザーの使い方を習得させる。	72	33	
	○入学後、4、5日目から給食指導を行う。時間に余裕をもって、複数の教員で一つ一つ確認しながら実施する。	85	25	
④	○暑い汁ものや、給仕が難しいもの、重いものは教職員が担当する。	90	51	
	○給食は少なめの配膳で、足りない場合はおかわりをするようにし、自分の適量を把握させる。	83	72	
	○トイレ、水飲み場の確認と、実地で使い方を説明する。	97	20	
	○休み時間等を活用してトイレに行くようにさせるが、我慢できない場合は申し出るようにさせる。	97	68	
	○自己紹介ゲーム等を行い、友達づくりを支援する。	89	28	
B 他者とのかわりに関すること	⑤	○隣同士の2人組から、生活班等へ、簡単な活動で小集団を活用する。	64	82
		○友達から言われてうれしい言葉や、いやな言葉等について話し合い、使うべき言葉づかいの指導をロールプレイ等を活用して行い、よりよい人間関係の基礎を育てる。	53	80
		○6年生等との交流を通して学校や上級生に親しみをもてるようにする。	98	60
	⑥	○休み時間は担任が児童と共に過ごすことで、児童に不安を与えないようにするとともに、児童理解を深める。	86	47
		○担任が給食班に順番に入り日常会話などで、児童とのコミュニケーションを図る。	47	41
⑦	○一度に複数のことを要求せず、児童にとってすべきことが明確になる分かりやすい指示で指導する。	87	74	
	○担任の言うことを何よりも優先して聴く習慣を身に付けさせる。	83	70	
	○一つ一つできるようになったことをほめて、自己肯定感をほぐす。	88	87	
	○友達とけんかをしない、先生の話をしっかり聞くことなど、優先順位をつけて、学校でのきまりを一つ一つ指導する。	83	84	
	○授業中と休み時間とは、とるべき行動が違うことを理解させる。	90	80	
C 学習に関する事	⑧	○学級単位での整列の仕方を覚えさせる。	97	55
		○学校生活のきまりを学年便りなどを通じて保護者に知らせ、理解を図る。	95	72
		○誰に対してもあいさつすることの大切さを指導し実践させる。	93	82
	⑨	○教科書及び時間割に関するガイダンスを行い、これからの学習の見通しを説明して、学ぼうとする意欲を喚起する。	80	33
		○45分を分割するなどして、無理なく1単位時間に慣れさせる。	82	37
○早寝早起きや、記名、あいさつ、返事等の生活習慣の確立を目的として家庭での課題を示す。		78	49	
○国語科・生活科の合科等で、あいさつや返事、鉛筆の持ち方、自分の名前の読み書きを練習する。		97	41	
○算数で、仲間分けなどを通して、数への興味をもたせる。		87	34	
⑩	○音楽科・生活科の合科等で、1年生を迎える会の呼びかけや歌、校歌の練習などを行う。	96	17	
	○生活科等で学校探検を行い、学校には様々な教室や施設があること、また多くの人がそれぞれの役割を果たしていることに気付かせる。	89	65	
	○小学校に入学して、やりたいことなどを言葉や絵で表現させる。	60	18	
⑩	○校歌の指導を通して、小学校の一員であることを自覚させる。	88	33	
	○体育科では、体づくり運動を通じて、体を動かすことの楽しさや心地よさを味わわせる。	73	64	
	○危険な場所や行為を具体的に判断する場を設け、安全指導を徹底する。	87	77	

※「観点」の丸数字の内容は、資料3「重点指導内容例」の「観点」の内容と一致する

※背景色薄グレーは80%以上、濃グレー(白抜き数字)は50%未満

4 今後の研究課題

より実用的で誰もが活用しやすい「スタートカリキュラム」にしていくために、以下の視点で研究を継続し「スタートカリキュラム改訂版」を提供し続ける。

＜改訂の視点＞

① 指導時期一覧表の作成

アンケート結果を踏まえ、第1学年担任や各校長から聞き取りをした結果、「スタートカリキュラム」試案の3つの視点、10の観点及び、指導内容については、大きな修正点は不要であるが、指導時期については見直しが必要であるとの結論に至った。そこで、「スタートカリキュラム指導時期一覧表」を作成し、効果的な指導時期を明確にする。

② 授業時間以外も含めた指導場면을想定した週ごとの指導計画の作成方法の提示

各学校において自校の実態に即して、創意工夫を加えながら活用できる形式とすることが必要であると考えた。入学時の特性として、授業時間だけでなく、登校時や朝の会、帰りの会、休み時間、給食、下校時等の指導も重要であることから、指導場面が分かりやすくなるように縦列を細分化し、1週間分で1シートとなる「スタートカリキュラムシート」を作成する。

③ 週案の具体例「スタートカリキュラムシートを活用した週ごとの指導計画例」

各学級担任が自校の行事等を勘案しながら週ごとの指導計画を作成しやすくするために、週案形式の枠の中に指導内容例を入れ、多少の修正を加えても、そのまま使用することが可能な具体的な週案例を示すとともに、作成マニュアルを作成する。

〈引用・参考文献〉

- ・新保真紀子「小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム」明治図書 2010年 p7-13
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成20年告示）」2008年
- ・文部科学省「幼稚園教育要領（平成20年告示）」2008年
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説、生活編」東洋館出版社、2008年
- ・東京都教育庁「公立小学校第1学年の児童の実態調査」2009年
- ・文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」2010年